

松尾芭蕉

「古池や蛙飛込む水の音」や「荒海や佐渡に横たふ天の河」、「夏草や兵どもが夢のあと」などの句で知られる松尾芭蕉は、江戸時代の寛永二一（一六四四）年、三重県伊賀市に生まれました。（写真1 松尾芭蕉誕生の地）

若いころから伊賀国上野の侍大将であった藤堂新七郎家に仕え、二歳年上の兄とともに北村季吟から俳句を習いました。芭蕉は二男でした。二八歳ではじめての句集『貝おほひ』をまとめた後、江戸（東京）に行き、俳句を専門的に創作する宗匠になりました。三六歳で東京の下町の深川に草庵（小さく質素な家）を結びました。そのとき門人から芭蕉を贈られ、庭に植えた芭蕉の木が大いに茂ったので、その家を「芭蕉庵」となづけました。

芭蕉は旅行に出かけるのが大好きで、『野ざらし紀行』や『鹿島紀行』、『笈の小文』、『更科紀行』などの紀行文を書きました。最も有名なのは『奥の細道』で門人の河合曾良と一緒に、奥羽・北陸方面の旅にでかけました。江戸の千住を出発して岐阜の大垣までの五ヶ月間、約二四〇〇キロメートルにわたる大旅行では、「行く春や鳥啼魚の目は泪」や「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」、「五月雨をあつめて早し最上川」など、すばらしい句を創作しました。芭蕉が四七歳のときの旅でした。大垣に到着した後、伊勢に行き、故郷の伊賀上野にも一時滞在しました。



【写真1】松尾芭蕉誕生の地（伊賀市赤坂町）



【写真2】俳聖殿（伊賀市上野丸ノ内）

芭蕉が亡くなったのも旅先でした。元禄七（一六九四）年一〇月一二日、大阪に滞在している途中に「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」という句を残して亡くなりました。ちょうど五〇歳でした。俳句の聖人という意味で、「俳聖」と呼ばれています。（写真2 俳聖殿）

山盛りの十七文字

く俳句を楽しもうく

二〇〇七年三月三十一日発行

編集委員 藤原 和好（委員長）

伊藤 政美

谷口 雅彦

尾西 康充

松本 吉弘（編集長）

森田 高志

山川 晃史

発行者 三重県生活部文化振興室

津市広明町十三番地

〇五九（二二四）二一七六

電話 文化印刷（有）伊勢市御蘭町七〇九

印刷所 Bunka Printing

